

漢法苞徳塾資料	No. 104
区分	基礎理論・経穴
タイトル	四海の運用問題
著者	八木素萌
作成日	1998.08.23

◎『靈枢』海論第 33 より

膻中	気之海	瘕門・大椎・人迎
衝脈十二經之海	血之海	大杼・巨虚上廉・巨虚下廉
髓腦之海	髓之海	百会・風府
胃	水穀之海	気街・足三里

四海の逆順	有余	不足
気之海	気満胸中・惋息面赤	気少不足以言
血之海	常想其身大・怫然・不知其病所	常想其身小・狹然・不知其病所
髓之海	輕勁多力・自過其度	腦転耳鳴・脛痠眩冒・目無所見・懈怠安臥
水穀之海	腹滿	餓不受穀食

関連して体調を概略的に観察して治療に有用な観点として「開・闔・枢」がある。
記述されているのは『素問』陰陽離合論第 6 と『靈枢』根結第 5 である。本文は両書の記述に大差は無い。また、「四街」の論が『靈枢』動輸第 62 にある。これは「頭部・胸部・腹部・足部」の四部に「経脈の気」を作用させる基本的な「穴」を指定したものである。また、『素問』水熱穴論第 61 の「胸内」「胃内」「四肢」「五蔵」の熱を治療する穴を記述している。

	陽經	陰經
開	太陽 開折則肉節澆而暴病起矣 取之太陽・視有余不足	太陰 開折則倉廩無所輸膈洞 取之太陰・視有余不足
闔	陽明 闔折則氣無所止息而痿疾起矣 取之陽明・視有余不足	厥陰 闔折則氣絶而喜悲 取之厥陰・視有余不足
枢	少陽 枢折則骨繇而不安於地 取之少陽・視有余不足	少陰 枢折則脈有所結而不通 取之少陰・視有余不足

本文の説明では－

陽経の開……洩者皮肉宛騰而弱也

闔……無所止息者真氣稽留，邪氣居之也

枢……骨繇者節緩而不収也

素問双行註では按九墟として「甲乙経も同じ」として以下の様に記述する。

開者所以司動靜之基	陽経	開折則肉節潰緩而暴病起矣・取之太陽
	陰経	開折則倉廩無所輸膈洞者・取之太陰
闔者所以執禁固之権	陽経	闔折則氣無所止息悸病起矣・取之陽明
	陰経	闔折則氣弛而善悲矣・善悲者取之厥陰
枢者所以主動轉之微	陽経	枢折則骨搖而不能安於地・故骨搖者取之少陽
	陰経	枢折則脈有所結而不通・不通者取之少陰

「四街穴」の内の「脛氣之街」の穴の問題について

※を成案に採る

☆脛氣の街－氣衝～承山・跗陽・崑崙・申脈・金門※

「脛氣之街」については、ともに『靈枢』動輸第 62 と『靈枢』衛氣第 52 に記述されている。

◆『靈枢』動輸第 62

「……衝脈者十二經之海也・与少陰之大絡・起于腎下・出于氣街・循陰股内廉・邪入臑中・循脛骨内廉・並少陰之經・下入内踝之後・入足下・其別者・邪入踝・出屬跗上・入大指之間・注諸絡・以温足脛・此脈之常動者也……今有其卒然遇邪氣・及逢大寒・手足懈惰・其脈陰陽之道・相輸之會・行相失也・氣何由還・歧伯曰・夫四末陰陽之會者・此氣之大絡也・四街者・氣之徑路也・故絡絶則徑通四末解則氣從合・相輸如環……」

◆『靈枢』衛氣第 52

「……請言氣街・胸氣有街・腹氣有街・頭氣有街・脛氣有街・故氣在頭者・止之于腦・氣在胸者・止之膺与背腧・氣在腹者・止之背腧・与衝脈于臍左右之動脈者・氣在脛者・止之于氣街・與承山踝上以下・取此者・用毫鍼・……所治者・頭痛眩仆・腹痛中滿暴脹・及有新積・痛可移者・易已也・積不痛・難已也。」

介賓・馬・楊は「踝の上下の諸穴」と解釈している。張隱庵は『靈枢』動輸第 62 を引用して「…故与足太陽之承山・交会于踝上以下・此足少陰又同衝脈而出于脛氣之街也」と衝脈・腎脈・太陽の脛氣との関連を指摘している。隱庵を採りたい。